

### 第3部

#### テーマ「18歳の扉を開いて、自分らしく歩む！」 ～学校と福祉の連携により安心して安全な地域生活を～

参加者 56名

司会:心身障害者福祉センター 車谷 直樹

記録:高橋 三樹子

話題提供 I 東京都立青峰学園 進路指導・相談支援担当主幹教諭 原 智彦氏

〈内容〉「特別支援学校における進路指導の現状と課題」

青峰学園は部門併置型の特別支援学校として21年4月に設立。その中で、知的障害教育部門高等部就業技術科は企業就労に向け、1年生から地域の協力を得て多様な就業体験を行っている。又、学校内の職業に関する教科では、企業等経験者の市民講師を迎え、アドバイスを受けながら取組んでいる。

知的障害の分野は発達障害への支援も一つの要因と思われるが、平成10年から在籍者数の増加が止まらない状況。一方、企業就労数は増加していて多くの企業が理解し雇用してきていることがわかる。最近の福祉的就労に関する分析は難しく、福祉制度の転換期であることも一因と見られる。

平成19年度厚労省自立支援プロジェクト調査研究の卒業生調査から進路指導の現状と課題を提起。就業後1から2年で2割が離職、この期間の支援が必要である。又、中心的な支援機関としては区市町村就労支援センターがあり、有効な制度として再就職につながっている。だが、ヘルパーや支援センターについては、利用意向が少なく、本人にサービスの情報が届いていないことが課題となっている。また、作業能力等の課題だけではなくコミュニケーションに関する課題が企業側からも指摘されている。教育と社会、あるいは福祉が、一人ひとりの支援計画・就労支援と生活支援を一体的に行えるような仕組みが必要。

話題提供 II 東京都立八王子盲学校 教諭 渡邊 富士子氏

〈内容〉「盲学校重複生の進路の課題」

八王子盲学校は都内で唯一の総合校であり、社会という出口に直結している都立盲学校2校のうちの一つ。進路に向けて自分自身や社会を知る経験としての進路学習・インターンシップ・現場実習を行っている。

盲重複生の進路の課題。卒業後に地域が受け入れるしくみをつくるためにも在学中からの地域との連携は重要となり、又、卒業後の課題を考え地域の支援に移行していくことが必要。視覚障害者専門施設を利用することが少ないため、地域の特別支援学校との連携をしている。環境を整備することで、視覚障害者の生活は大きく安定する。進路を考える時、卒業後の行き先を決めるゴールではなく、どのように生きていきたいかというスタートと考え支援していく。

盲重複生は一人家にいることが多くフラストレーションが溜まり、高まるエネルギーが自傷、他害、強いこだわり等に繋がってしまうことが多い。家族以外の人と余暇を過ごす機会を少しずつ取り入れ、楽しみに変えていく取組みをしていくことで、在学中から卒業後への支援の移行も自然にできると考える。移動支援、余暇利用等を継続して利用することで、見通しが持て、支援者との時間を楽しみ、意欲的に行動できるようになるケースが多くみられた。又、ドリルや教具をつかっての学習をすることも、やりとりをする喜びや意識を高めていくことにもつながることがある。人にほめられ認めてもらうことで、自尊心も高められ、フラストレーションが減ることもあるようである。得意なことを伸ばすことが人間のかかわりを増やすことにつながり、地域の人と一緒に過ごせることも盲重複の方の「自立」と捉えてもいいのではと考える。

|   |                              |
|---|------------------------------|
| 話題提供 III  | 東京都聴覚障害者生活支援センター 副主任 平野 基浩氏  |
| <p>〈内容〉「東京都聴覚障害者生活支援センターについて」</p> <p>東京都聴覚障害者生活支援センターは日本に3つある聴覚・言語障害者更生施設のうちのひとつで、全国から利用者を受け入れ、就労・生活支援を行っている。利用定員は30名だが施設があまり知られていないためか現在利用者は19名。平均利用期間は2年8ヶ月で地域生活や高齢者、聴覚障害者入所施設等へ移行しているが、移行できず10年くらい施設生活を継続しているケースもある。</p> <p>特別支援学校との連携について。学校からは夏休みに「利用させたい」という声もあり一週間程度の体験利用を通して本人、施設がお互いを知る機会になればと考える。軽度の知的障害を合わせ持つ都外の学生が2週間、体験利用した事例について。東京で企業実習の予定であったが都内在住者でなければ実習できないということで、施設内の活動に参加した。学校は今後についてしっかりと支援計画を立て保護者も施設について理解。現在、都外の授産施設を持つGHか当センターの入所を検討中。</p> <p>課題が大きくなってからの対応では遅い。早期による相談につながる仕組みが必要。</p>  |                              |
| 話題提供 IV   | 障害者支援施設すだちの里すぎなみ 施設長 仁田坂 和夫氏 |
| <p>〈内容〉「すだちの里のとりくみから見えてくる継続した支援の必要」</p> <p>すだちの里は3年を目途に卒業し、地域生活に移行できることをめざし、利用者の自立生活に向けた支援を行っている。移行先は自宅・GH・CH・施設・アパート、居住場所や重度障害者の日中活動の場などの受け皿が課題となっている。移行後についても支援は継続し個別支援計画を作成、本人・関係機関によるチーム支援確認の場を持ち継続した地域生活を送るためにそれぞれが責任を持ち支援している。</p> <p>高校卒業後入所の事例。愛の手帳3度・区分4、H18年に入所、20歳の時に特例子会社へ就職、H21年に施設を卒業しGHでの生活をはじめますが、自宅で生活したいという思いが強くGHでの生活に失敗。関係機関で連携を取り支援を行い、現在はすだちの里に短期入所しながら就労継続中。</p> <p>高校卒業生受け入れの課題。すだちの里は卒業後の進路として就学中に身につけきれなかった社会生活力などを家庭から離れた環境の中で支援していることに重点を置いているが、卒業後の施設利用が増えない原因として施設・学校の連携が取れていないため進路の情報提供がされていないこともある。施設から学校への働きかけをするなど、在学中からの施設利用について区と共通理解を図っていく必要がある。また、卒業の時期(4月)に生活施設である暮らしの場に定員の空きが即あるわけでないことが課題でもある。</p> |                              |
| <p>〈シンポジウム〉</p> <p>テーマ「教育と福祉の連携」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 在学中から本人・保護者の希望を聞きながら先生や地域の関係機関が協力し、24時間の生活を考えるための個別の支援計画を作ることが大切になってくる。何かトラブルがあった時に、本人に合ったムリのない支援をするために、地域の関係者と出会う機会を意図的に作っていく必要がある。入所の体験はスムーズにGHへの移行が進むように、就労体験については誉められたりすることが本人の意欲につながるなど、どちらについても地域の協力が必須。又、就労支援センターの職員が本人の学校での様子を見て本人の特性を理解することで次の段階に進めるのではないかと考える。</li> <li>○ 盲学校は課題が多いと感じた。就労を決める支援は福祉課訪問やインターシップでの企業とのつながりでできているが、生活支援はできていない。支援計画は担任レベルであり地域との連携の必要性を感じた。今までは、特別なケースのみ関係機関での話し合いを持っていたが、どの生徒であっても関係機関と連携していく必要がある。夏休みの生活は盲重複生の課題だが、この時期に地域と連携をとる</li> </ul>  |                              |

など、学校においても取組めることがあるのではないかと感じた。

- 聴覚障害者生活支援センターでは現在、2名の方について学校から相談を受けている。相談される方のほとんどが家庭で上手くいっていない。本人が積極的に動いているわけではなく、両親も問題を整理することが難しい。こういったケースについて、ぜひ、早い段階に学校の先生が実施機関に相談に行ってほしい。そして、家庭が崩壊する前に支援につなげてほしいと思う。
- 18歳を境に福祉を利用する際、関係者が集まって支援を考えていく必要があるというのはその通り。では、本人が主張できない場合、関係者の中の誰が支援の必要性について声を出していくのかということがあるが、杉並では相談機関がワンストップで声をかけ支援につなげている。
- この後、卒業後にすだちの日中活動を利用する予定の方がいるが、学校の先生が積極的に取組まれた結果、利用につながった。
- <質疑・応答>
  - Q:永福学園は今年100名卒業すると思うが、就労支援のほうには情報がきていない。具体的にはどのように支援していくと思われるか。
  - A:就労支援センターを活用していくことになると思う。生活の部分と就労の部分を総合的に支援する支援計画を立てていく必要がある。在住区の就労支援センターの方に一緒に企業へ行ってもらったり、授業にも出てもらい出会う場を設定していく。リレーゾーンを実施機関・学校・保健所などが一緒に動くことが大切と考える。